

## 15 ヴェズレー (フランス)

道とワインと景観



## ●都市としての道

ヴェズレーはパリから南東に200km程のブルゴーニュ地方の街である。この小さな街を訪れる理由はロマネスク<sup>1</sup>の教会を見に行くためである。

この街に着くと、いたるところに貝殻の紋章が目につく。小高い丘の上にある教会を目指して坂道を上っていくと、道に向かって小さく張り出した店の看板や、路面にもほたて貝の模様が見られる。実はこの貝殻は聖ヤコブを示すマークである。なぜ聖ヤコブか。それはこの街が聖ヤコブが埋葬されたと伝えられる聖地に至る巡礼路の出発点であるからだ。その聖地は遙か西の果て、スペイン北西端のサンティアゴ・デ・コンポステーラ<sup>2</sup>である。

紀元1000年、ミレニアムはキリスト教にとって最大の節目であった。審判に怯えていた人々は、聖年が無事に過ぎると、いっせいに教会や礼拝堂を再建し、巡礼に出たのであった<sup>3</sup>。

ロマネスク期に書かれた『サンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼案内書』には4つのルートが記されている。それぞれの起点はすべて今日のフランス国内で、A.ヴェズレー (ウィア・レモウィセンシス)、B.トゥール (ウィア・トゥロネンシス)、C.ル・ピュイ (ウィア・ポディエンシス)、D.サン・ジル (ウィア・トロサーナ) から出発しピレネー山脈を越えてスペインで合流する。この巡礼路を通る人はフランス国内のみならず、A.スカン

ジナヴィアやドイツ、B.ベネルクス、C.東欧や南ドイツ、D.イタリアなど、全ヨーロッパから集まったという<sup>4</sup>。驚くべき広域の、出自も言語も異なる人々が、同じ信念に突き動かされて、西へと歩みを進めて行ったのである。つまり巡礼路は、都市だったのである。

この巡礼の動きを通して、ヨーロッパにキリスト教世界のまとまりとしての認識が形成された。そしてもうひとつの聖地エルサレムへ向けて十字軍が派遣される。ヴェズレーは第2回十字軍(1146)の結成が呼びかけられたところでもあるのだ。

## ●都市としての修道院

サンティアゴへの巡礼路は途上にある教会をつないで形成されていった。それぞれの教会は聖人の遺体、衣服、道具などの聖遺物を持ち、人々はそれに奇跡を求めた。ヴェズレーでは8世紀にもたらされたという聖女マグダラのマリアの遺骨を聖遺物とする。そのためヴェズレーの教会はサン・マドレーヌと命名された<sup>5</sup>。この教会はそれ自体が巡礼地であり、こうした巡礼地を辿りながらサンティアゴという大巡礼地に至るというわけである。

ヴェズレーも含めて、巡礼途上の教会はほとんどが修道院の附属施設である。巡礼者たちの世話は修道院が中心となって行った。修道院は巡礼の組織も行い、サンティアゴへの巡礼を勧め、道を



図1 ヴェズレーの坂道 貝殻の紋章を掲げた店の看板

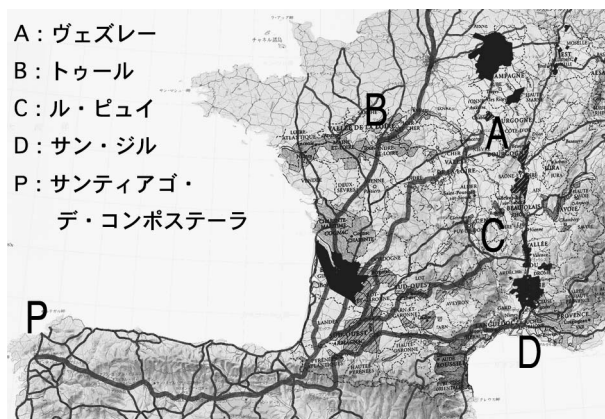


図2 巡礼路 (A,B,C,D~P) とワインの産地 (塗りつぶしおよびアメリカ部分) (文献①と⑧から作成)

\*1 ロマネスクromanesqueは「ローマ風」の意味で、古代ローマの要素を受け継いでゴシックが出現するまでの時期を指す。この本場たるフランスではromanと呼ぶのでややこしい。

\*2 サンティアゴは聖ヤコブのスペイン語読み。コンポステラは「星の野」の意味。813年頃、隠者が天使から聖ヤコブの墓の場所を告げられ、星の光が照らす丘から墓が掘り出されたという。

\*3 キリスト教の3大巡礼地はエルサレム（キリストの墓＝聖墳墓教会）、ローマ（ペテロの墓＝サン・ピエトロ大聖堂）、サンティアゴ（聖大ヤコブの墓＝サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂）である。

\*4 文献①p.14

\*5 文献①p.351 なお、マドレーヌはマグダラのフランス語読み。

\*6 文献③p.6

#### ●参考文献

①長塚安司、五十嵐見鳥他『世界美術大全集8 ロマネスク』小学館,1996

整備したのはブルゴーニュに本部のあったクリュニー会の修道士たちだった。修道院は戒律に則った共同生活を確保するために、自給自足できるだけの農園や医療施設、図書館などを組織していた。中世、修道院は醸造所、病院、大学などの機能を果たしていたのである。そこはまた、異なる出自の者たちが自らの運命を超えるため集まっていた場所であった。すなわち修道院は、巡礼路という都市のなかの最も都市的な場所であった。

修道院に集積された高度に発達した学問のおかげで生み出されたのは、思想だけではない。今日最も身近な遺産はおそらくワインであろう。フランスのワイン生産地の分布は、サンティアゴへの巡礼路とその副次路上に見事に一致する。ヴェズレーの場合はブルゴーニュにあり、道を北上した先にはシャンパーニュ地方が広がっており、さらにサンティアゴへの途上ではトゥールからの道が近づいてきたあたりでボルドーの葡萄畑を通過する。つまり、巡礼路と修道院はフランス的景観形成の核なのである。

ヴェズレーでは街のあちこちに地下室をもつワインの専門店があり、とても美味しいレストランも簡単に見つかる。文化の蓄積を舌で知ることができる街である。

#### ●ひとつの様式、それぞれの表現

現在のサント・マドレーヌの身廊は1150年頃に

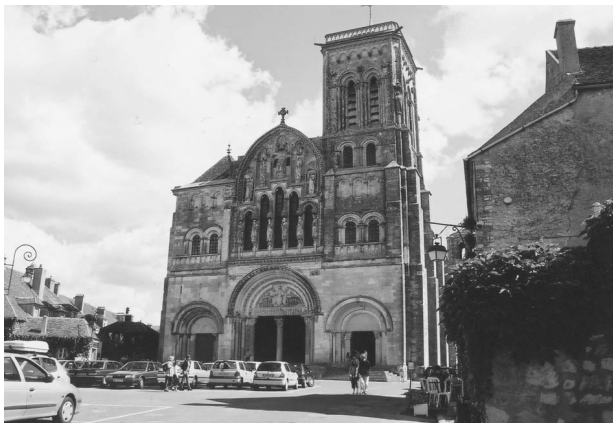


図3 サント・マドレーヌのファサード

②櫻井義夫、羽生修二他『SD007 ツール・ド・ロマネスク』鹿島出版会,2000

③饗庭孝男、河辺哲雄他『SD9610 中世の光と空間』鹿島出版会,1996

④G.COURTÈS, *Les chemins de Saint-Jacques de-Compostelle*, Éditions Sud Ouest, 1999

⑤P.HUCHET, Y.BOËLE, *Sur les chemins de Compostelle*, Éditions Ouest-France, 2002

⑥ジャン＝ロベール・ピット、高橋伸夫・手塚章訳『フランス文化と風景』東洋書林,1998

⑦レジーヌ・ベルヌー、ジョルジュ・ベルヌー、福本秀子訳『フランス中世歴史散歩』白水社,2003

⑧ロジェ・ディオ、三宅京子他訳『フランスワイン文化史全書』国書刊行会,2001

完成したと言われ、内陣部分はそれより50年ほど遅れてゴシック期につくられている。19世紀にヴィオレ・ル・デュクの手によって修復され、現在の姿となった。この教会はロマネスクの頂点とも言われる彫刻の宝庫で、ナルテクス（前室）と身廊を分けるタンパン（アーチ下の半円形の部分）や柱頭に見事な石彫が施されている。それらは石の聖書であり「読まれた」\*6なのである。

この建築物はまぎれもなくロマネスクの代表であるが、外観、内部ともにこれと同じ表現の聖堂は他にはない。ロマネスクの聖堂は、平面の形式、横断アーチ、交差ヴォールト、トンネルヴォールトなどの点で一定の共通性を見出すことはできる。しかし、建築的要素の組み合わせや表現は実に多様で、様式としての共通性、統一性は古代ローマやこの後に来るゴシックとは比較にならないほど弱い。このことはロマネスクの聖堂がそれぞれ独自の地域性に支えられていることを示している。

地域ごとの解釈から生み出された聖堂は、シリーズとして巡り歩く愉しみを提供してくれる。古代ローマが海の帝国だったとすれば、ロマネスクは陸にできた地方のネットワークであった。地元



図4 サント・マドレーヌの内部 ナルテクス（前室）と身廊を分けるタンパンの彫刻

にある材料と表現で、ときには巡礼者の手を借りながら積まれた石の聖書が、ロマネスクの聖堂なのである。その建築空間の気高さは、信じる者がつくる者であったことに発している。